

家族關係に現れたる切支丹の生活

長崎高等商業學校教授

小山 隆

一

天文十八年フランシス・ザヴィエルが始めて基督教を傳へてから僅か數十年の間に示されたその驚くべき傳播性は學問的にもまことに興味ある問題であるが、然し乍らその後豊臣・徳川兩家によつて採用された徹底的禁教政策にもかゝらず、尙九州西端の諸地方には不斷の危険と困難とを忍びながら、三百年の間ひそかに信仰の聖火を燃やし續けて來た幾多住民のあつた事は、一層の検討を必要とする科學的關心事である。殊にカトリックの教は、單に個々人の信仰の問題のみならず、廣くその家族生活、經濟生活に對しても嚴格な拘束を約束してゐるだけに、カトリック教徒の生活は宗教學的興味以外、更に社會學的、經濟學的關心の對象であると云はねばならない。本稿に於いては、渡來當初に於けるカトリックの教と、當時の我が國の家族的慣習とが如何なる點に於いて相矛盾したか、又それが如何に指導されたか、更にそれが禁教時代の切支丹の間では如何に成り到つたか、これ等の問題に就いて若干の推論を試み以て切支丹の生活變遷の一面を窺つて見たいと思ふ。

一一

舊時代に於ける日本の家族的慣習がカトリックの教義と相容れなかつた最も主なる點は凡そ三つを挙げ得ると思ふ。第一は一夫多妻或は著妾の風であり、第二は離婚、第三は殺兒墮胎の慣習であつた。此の事は當時の耶蘇會士通信等の中にも屢指摘されて居るところであり、傳道者達が銳意その矯正に努めたあとも窺はれるのである。

例へば一夫多妻の慣習に就いては、一五六六年（永祿九年）葡萄牙の宣教師ルイス・ダルメイダが耶蘇會に送つた通信文の中にも次の様な一節がある。

……信仰の事を好く教へられ、キリシタンとなる爲めの説教終り、祈禱を覺えたる後結婚の事に付き彼等に話したり。蓋し彼等は各々三四人の妻を有し、此事を知らざりしが故なり。談話の終に彼等に對ひ、若し婦人等を出し、第一の者と結婚し、他の妻を持たざることを約束し、彼等も亦同一の事を爲すに非らざれば、洗禮を受くべからずと説きしが、彼等は去りて各々其妻を定め、死に至るまで結婚を續くる決心をなしたるを以て、主が彼等に恩寵を與へ給ひしことを認めたり。説教には多數の高貴なる婦人集まり、王妃（五島侯の妃）の家よりも亦侍女多く來り、予が家に接したる他の家に主人の妻と共に集まりしが、予が、夫は悉く婦人を出し唯一人と死に至るまで結婚するにあらざれば之をキリシタンとなすことを欲せざるを聞くに及び直に之を王妃に告

けたり。王妃は其時席に在りし予が家の主人に對ひ、汝がキリシタンとなれる爲め汝の妻は幸福なりと云ひ、デウスの正しくして眞なるを賞讃し始めたり。依て王妃其他當國の人々は皆夫をキリシタンとなし、彼等も亦キリシタンとなることに決心せりとの評判婦人等の間に傳はれり。蓋し三四人の妻を有し不満なる事ある時は直に街路に出し、他の妻を納るゝことは甚だ普通にして、女子の間にも亦其父又は親戚の家に到り同様の事をなす習慣ありしが故なり。

——一五六六年十月廿日附志岐島發イルマン、ルイス、ダルメイダより耶蘇會のイルマン等に贈りし書翰。村上直次郎譯
『耶蘇會年報』長崎叢書二卷、二八七——二八八頁。

これは當時の我が國の婚姻の實情を示すと共に、それに對處する宜教師の態度を示したものとて興味ある資料である。一夫一妻制の確立は、歐羅巴に於いても、羅馬の法制と相並んで、基督教の力に負ふところが多かつたのであるが、日本に於いても亦、基督教によつて一夫多妻的慣習の放棄、一夫一妻の道德的自覺が力説された事が窺はれる。

一夫一妻制の確立を要求する教義は更に離婚の否定と結びつく。文祿元年日本版の切支丹教義の中にも、『一度縁を結びて後は男女ともに離別し又餘の人と交る事皆て叶はざるものなり。それを如何と云ふに生得マチリモウニヨ(婚姻)の約束は互に何時までも別るゝ事あるまじきとの固き契なればなり』と説き、更に夫婦離別し、男子は父に隨ひ、女子は母に隨ふといふ當時の慣習の然るべからざる所以を理をつくして説いてある。

然しこれ等にも増して宣教師達の心を捉へたものは、人爲的な人口制限の慣習であつたやうである。彼等の書翰其他の記録の中には、殺兒墮胎に關する記述最も多く、徳川中期以後盛になつたやうに見られてゐる人口制限の事實が、實に既に徳川期以前から各地に盛に行はれてゐた事が知られるのである。その實際と又宣教師達の指導方法を例示する爲に、こゝに若干の引用を試みてみよう。

日本は甚だ高き山の國にして多數の人民あり。若し出生の小兒を殺すことなくば彼等は互に食むべし。出生の際殺す所の小兒の數は無限にして、十五人二十人を殺したる婦人あり。

——一五七一年十月六日(元龜二年九月十八日)附ゴア發、バードレ・ガスパル・ビレラよりポルトガル國アビスの爵院のバードレ等に贈りし書翰——村上直次郎譯耶蘇會士日本通信下卷二二六頁。

異教徒は飢饉の際に婦人出産する時は、其子を海岸へ携へ行きて石を其上に置き、潮の來りて之を持去るに委するを習慣とす。其理由として食物を與ふること能はざる者を育つるは不可なりと言へり。

——一五六〇年十二月一日(永祿三年十一月十四日)附、イルマン・ゴンサロ・フェルナンデスがゴアよりコインブラの耶蘇會のコレシヨのイルマンに贈りし書翰——村上直次郎譯耶蘇會士日本通信豐後篇上卷三〇〇頁。

彼等(日本人)は不思議に子女を虐待し、多數は必要なし、其家を維持するには一人又は二人を以て足れりと言ひて幼少なる時之を殺せり。惡魔は又他の欺瞞の方法を用ひ、女子を生む婦人は皆地獄に行きて救はるゝことを得ずと説けるが故に、婦人は之を恐れ出産前藥を吞みて胎兒を殺すことあり。

——一五五七年十月二十九日(弘治三年十月八日)附、バードレ・ガスパル・ビレラが平戸より印度及び歐洲の耶蘇會のバ

ドレ及びイルマン等に贈りし書翰——村上直次郎譯耶蘇會士日本通信豐後篇上卷二〇八—二〇九頁。

〔永祿三年豊後に於ける降誕祭の演劇、其次にソロモンの裁判を願ひし二人の婦人を演出せり。此劇は母が子に對して有する自然の愛の力、其他聖書に記したる多くの事を演じ、子を殺す當國の異教徒の婦人等を赤面せしむるに好きものなりき。〕

——一五六一年十月八日（永祿四年八月二十九日）附、イルマン・ジョアン・フェルナンデスが豊後より耶蘇會のイルマン等に贈りし書翰——村上直次郎譯耶蘇會士日本通信豐後篇上卷三四九頁。

以上は唯當時の慣習の一斑を窺ふ爲に二三の引例を試みたに過ぎないが此種の記録は此他にも數多く散見される。更にコリヤドの懺悔錄の中にも、人口制限の罪惡に就いての懺悔の例の擧げられて居ることは、夙に武藤教授によつても指摘されて居り（武藤長藏「長崎に保存され居る古き懺悔書」及び著書中人口を論ずる書籍に就て「道徳」）又吉野作造博士の翻譯もあるが、こゝではこれ以上傷心の事實を重ねることは避けたいと思ふ。

過去に於ける一夫多妻、離婚、墮胎殺兒等の家族的慣習が、如何なる程度に行はれたかは、右の諸例によつても略察せられるのであるが、これ等の慣習に對する否定が、單に道德的見地からのみでなく、信仰を基礎とし、具體的には切支丹十誡の中の第五と第六即ち人をころすべからず、たはけ事すべからず等の誡律によつて基礎づけられてゐたことは、基督教の普及と共にその效果の顯著であつたことを想はしめる。殊に初期傳道者達の獻身的熱意は、苟も教義と背反するやうな行爲に對しては、徹底的な改更を要求してやまなかつたであらう。然しな

がら其後間もなく採用された禁教政策は、果して此の様な教義によつて植ゑつけられた新たな苗を何時迄も生存せしめたであらうか。徹底的なる彈壓と周倒なる警戒網の中にあつても、尙一部村民の間には信仰の火は斷やされなかつた。然し乍らあらゆる警戒の眼をくぐつて尙よくその教義の末々迄を忠實に守り了せる事が果して許されたであらうか。禁教以來信仰の指導者を失つたばかりでなく、秘密の漏洩を極度に恐れるところから、互に意見を交換し、その誤謬を訂正するやうな機會さへ、全くもつ事の出来なかつた謂はゆる潜伏切支丹に、その信仰形式や行動の統一を如何にして期待する事が出来るであらうか。従つて年と共に、教義の節々さへも明かでなくなつてゆく密教の徒に、異教徒の慣習や制度の壓力を防ぐだけの自覺と力とを望むことが果して可能であらうか。吾々は此の問題に答へる前に、先づ徳川時代に於ける禁教政策が、密教者を如何に狭い社會の中に封じ込めたかを知る手がかりとして、切支丹部落の通婚範圍を調べて見よう。

三

切支丹部落の通婚範圍を明かにする最も古い材料として、私は長崎縣立圖書館所藏の貞享三年豊後國切支丹宗門親類書二冊を利用し度い。これは豊後國大分郡葛木村を始めとして、同郡十五ヶ村、更に玖珠郡二ヶ村を加へた十七ヶ村の切支丹親縁者の調査書である。豊後は人も知る如く大友宗麟の保護によつて、我が國でも最も早く基督教の布教されたところであるが、切支丹剿滅の歴史から見れば、徳川前期に於る最後の大檢舉の行はれた地

方である。而して該書はこの最後の大檢舉に於ける調書であるが、萬治三年（一六六〇）から天和二年（一六八二）の間の、召捕人二百二十人の親類・縁者・四等親に至る迄と、舅・姑・小舅・小姑とを、一人一人その生所・現住所・續柄・年齢及切支丹取調並に處分の年月日等を明細に記しており、當に切支丹迫害史の資料としてだけで

第一表 徳川初期豊後國切支丹諸部落
地域別通婚數

郡村名	村内婚	村外ヨリ 入 婚	村外へ 出 婚	備考	調書登録 召捕人数
大分部葛木村	57	55	29		92
同 門田村	44	15	17		59
同 上光永村	3	2	4		4
同 下光永村	30	16	19		27
同 米良村	7	2	2		4
同 眞荳村	5	4	3		7
同 昆布菰村	5	—	4		2
同 千歳村	3	1	1		6
同 乙津村	7	9	6		5
同 山津村	2	3	2		2
同 高松村	7	4	10		4
同 原 村	—	2	6		1
同 高松町	—	1	—		2
同 津守村	—	—	—		1
同 雄城村	—	2	1		1
玖珠郡右田村	—	—	—		2
同 松木村	—	—	—		1
計	170	116	104		220

なく、宗門帳の未だ作られなかつた時代の重要な家族研究資料である。これは夙に姉崎博士も注意され、その詳細な研究が博士の著「切支丹宗門の迫害と潜伏」の中に發表されて居るのであるが、こゝでは徳川初期に於ける當地方の通婚範圍をこれによつて確めて見よう。先づ各村に於ける村内通婚者と村外通婚者とを區別するならば第一表のやうな數字が得られる。

村落別では數字が小さい爲に一概にその傾向を斷じ難いが、それ等を總計した數字に就いて見るならば、村内婚一七〇に對して村外よりの入婚は一一六、村外への出婚は一〇四、即ち入婚に於いては四〇%、出婚に於いては三八%が、村外との通婚である。即ち出入婚共に約四割が村外との通婚であるが、當時の農村としては、これは必ずしも地域的內婚、從つて地域的封鎖の左迄著しい特徴を示すものとも認め難い。尤もそれ等の通婚距離は他村ではあつても極めて近距離の村に限定されて居るのである。一々の村を列舉する煩を避ける爲に、中でも最も信仰者の多く、調書登錄召捕本人九二名を數へ、從つて通婚數も最も數多く得られる葛木村のみを代表として取上げて見よう。第一表の示す通り、葛木村の通婚數は、村内五七に對し、村外よりの入婚五五、村外への出婚二九を數へるのであるが、村外との通婚は大體に於いて大野川以西、而も村を中心とする半徑二軒の圈内に集中されてゐるのである。これは當時これ等の地方一帯に尙ひそかに基督教を信じて居り、而も禁教後間もなき事とて、相互の信仰上の交渉と理解とが深かつた爲、必ずしも自部落内に限らずとも、近郷の同信者から配偶者を選び得た爲であらう。然しながら調書記載の大檢舉以後、同地方は遂に彈壓に抗しかねて、完全に棄教して了つ

第三表 黒崎村入婚者出身地方別(實數)

	自 村	他 村	計
幕 末——明治5年	873	44	916
明治31——36年	167	24	191
昭和5——9年	122	94	216

第四表 同 上 (百分比)

	自 村	他 村	計
幕 末——明治5年	95.1	4.8	100.0
明治31——36年	87.4	12.5	100.0
昭和5——9年	56.4	43.5	100.0

徑の圏内から出て居る。

以上の如く徳川前期に於いて完全に棄教するに至つた豊後の地方では、其後に於ける通婚區域は一般平地の農村のそれと大差無く、比較的交通の便利な近郷諸村との婚姻が大部分を占めるに至つてゐるのである。これに反して徳川三百年の禁教時代を完全に潜伏して、その信仰を變更することの無かつた地方では、決して右の示すやうな社會的解放性は認められない。試みに切支丹の潜伏した重要な地方と見られてゐる長崎縣西部海岸、謂はゆる外海地方、即ち今日の西彼杵郡黒崎村を中心とする地方の通婚區域を調べて見るならば、そこには驚くべき地域的封鎖性が見出される。即ち黒崎村の明治六年一月改正の戸籍簿によつて、幕末明治初年の通婚状態を調べると共に、其後の變化の模様を知る爲に、明治三十一年から三十六年の間の身分登記簿と、更に昭和五年から九年に

至る人口動態調査票控によつて、明治中期及び最近時に於ける入婚者出身地方別を見るに、第三表及第四表の様な結果が生れる。

此の表によれば、黒崎村の婚姻は、幕末明治初年に於いては、その九五%迄が村内婚であり、他村よりの入婚者は五%にも満たなかつた。明治中期は稍解放的になつたといふものの、尙他村よりの入婚者は一二・五%に過ぎず、最近に於いて漸く移住出稼其他による生活圈文化圏の擴大によつて、四三・五%の他村の子を入婚させてゐるのである。尤も右は比較の便宜上現在の行政區劃としての黒崎村を範圍としたのであるが、更にこれを部落別に調べて見ても、矢張りその大部分が部落内婚者によつて占められて居ることを知るのである。即ち明治五年の舊村別に從つて調査するならば、黒崎全村(内上黒崎郷缺)總數九一六の婚姻中、部落内婚は八四〇、即ち九一・七%を占めてゐる。これと同じ時代の葛木村の部落内婚二五%に比較するならば、實に驚くべき差異のあることを知らねばならない。

思ふに背後に幾多の戰慄すべき歴史を擔ひ、更に嚴重なる宗教的監視の下で、尙その信仰を續けるには、勢ひ同じ信仰を有し、最も信頼出来る少數者のみに、その關係が限定されると云ふ事は、已むを得ないところであり、殊に生活の内面を一切曝け出し只相互の信頼により共同の精神によつてのみ成り立つ家族關係に於いては、異教の者を交へると云ふ事は到底爲し得なかつたところであらう。又家族の成員を他地方に析出すると云ふことは、當時の社會的困難の上に、心理的にもこれを許さなかつたであらう。禁教時代の異教徒との通婚拒否は決し

て今日に於けるカトリックの方針と同一視すべきものではなく、只秘密漏洩を恐れ最も信頼せる者の間にのみ交ると云ふ必要が然らしめたと見るべきであらう。

四

以上の通婚區域の例によつても分るやうに、禁教政策はひそかに殘存した切支丹を非常に狭い社會の中に封じ込んだが、同時に他面ではその言動の上に異端者としての態度の現れることを極度に警戒しなければならなかつた。従つて心の内では同じ信仰を抱く者であつても、未知の者であれば互にその信仰を語り合ふことも無く、爲に信仰の精神のみは續いても、その教義は益々謬られ忘失されてゆくのであつた。切支丹の最も大切な十戒さへも、その内の幾つかはいつの間にか忘れられ、纔かに三ヶ條乃至は四五の箇條が、意味も不明のまゝに傳へられると云ふ有様であつた。其處に嘗ては破戒として固く警められてゐた家族的諸慣習が、一般社會慣習としての壓力の故に、又彼等自らの生活の必要の爲に、宗教的無自覺のまゝに再び盛り上つて來たのは當然である。

嘗て戸田教授は長崎市浦上に於ける大正八年より昭和三年の間の婚姻と離婚の調査の結果、特に切支丹の歴史を以て有名な同地に、尙婚姻千に對して四一・五一といふ離婚率のある事を指摘され、これに對して『天主教會の規準に従へば離婚は罪惡であるにもかゝらず、周圍の人々が之を罪惡であるとする傾向を持つて居らぬ故に、一方に天主教の教義を守らんとする者も、他方に地方的傳統に支配せられて離婚し易くなるのでなからうか』と

の推測を下されてゐる。(戸田貞三、家族と婚姻、八三頁)既に今日のカトリック教徒の間では牧師の指導によつて終生變らぬ婚姻を原則としてゐるやうであるが、潜伏時代には婚姻の戒を破る事は、多くの場合恐らく宗教的反省なくして行はれたのであらう。又浦川和二郎氏は次のやうな事實をも述べられてゐる。

海外地方では、離婚と墮胎と偷盜だけは、世界の終にも赦されないと云ひ、浦上では、離婚するとコンチリサンを六萬遍誦へなければ救からぬと稱して幾分かは遠慮して居た様なもの、夫れでも異教者同様に随分離婚は行はれて居る。(——浦川和二郎、切支丹の復活、前篇三四九頁。)

次に蓄妾の形に於ける一夫多妻の制は、もとより封建時代にあつても上下あらゆる階層に行き渡つてゐたのではない。恐らく勢力ある支配階級の間之主として行はれたのであつて、自己の生活に汲々たる下層民の間にそれ程の餘裕は到底考へ得られない。支配階級に關する限りでは切支丹の歴史は永續しなかつたのであるから、切支丹の間に於ける蓄妾の風から革められた一夫一妻制の成行を問題とする事は無意味であらう。但し若者宿等に於ける兩性關係は、特に五島等に於いては比較的近年迄相當著名な事實であり、切支丹部落も亦必ずしもそれが除外例ではなかつたやうであるから、彼等潜伏切支丹の間に於いても嚴密な意味の一夫一妻制が保持されたと見る事は六ヶしいやうである。

然しこれ等にも増して吾々の關心を喚ぶものは人爲的な人口制限の事實である。上に述べたやうに、一般に切支丹の社會圈生活圏は極めて狭い。その様に非常に窮屈な地域的封鎖が切支丹の生活を非常な困窮に導いた事

は想像するに難くない。今日でも舊切支丹部落を歴訪して直ちに眼につく事は、さ、やかな住ひが土地不相應に多數密集してゐる有様である。今日のやうに經濟的活動の自由と共に經濟的地位の上にも非常な變動の生じ得る時代に於いても、尙且つ切支丹部落の生活は一般には向上してゐるとは認め難い。況や舊時代のやうに、制度の上でも職業的地理的に生活を拘束されて居た他に、彼等自らの秘密を確保する爲に、一層社會圈を限定することゝなつた切支丹の生活が、極度に切詰められ、最低生活線の近くに迄押し下けられてゐたであらう事は容易に想像される。既に此の様な最低生活線のあたりを彷徨する者にとつて、大きは脅威は人口の増加といふ事である。

尤も寛政年間に外海地方の切支丹は、五島侯の手によつて多數五島の島々に移住させられたやうな事はある。然し斷えず増加する人口の問題は、到底一回の移住によつて解消されるものではない。そこに矢張り人爲的な人口制限の方法が、異教徒と同じやうに不可避の手段として選ばれた事が察せられる。殊に大村藩の如く藩の方策として長男以外の者を養はせない方針を採るやうなところもあり、一般にその様な方法に對して道德的非難の向けられなかつた時代には、切支丹も亦教養の戒を次第に遺忘するに至つたであらう。もとよりの程度にかゝる罪惡が犯されて居たかは容易に推測を許さない。又地方によつてその程度は決して一樣ではなかつたやうである。

こゝでは間接にそのやうな事實を推定する爲の一つの方法として、切支丹部落の年齢階級別人口を算出し、圖示することを試みて見よう。先づその資料はいづれも信教の自由の許される以前の事實に據る事とし、黒崎村は明治六年一月改正の戸籍に基いて明治五年末現在で年齢を算出した。但し同村は舊戸籍の一部缺如と調査の都

合上、永田郷及び出津郷のみに限定した。次に五島は切支丹部落の最も多數散在するところであるが、これも便

第五表 明治初年切支丹諸部落年齢階級別
人口(實數)

年 齡 階 級	黒 崎 村		福 江 島		葛 木 村	
	男	女	男	女	男	女
0—5	155	181	102	85	32	15
6—10	177	158	110	87	21	16
11—15	131	134	86	80	19	15
16—20	115	148	104	84	17	20
21—25	120	132	94	69	15	16
26—30	128	132	96	71	14	12
31—35	101	84	80	47	9	11
36—40	84	72	50	53	15	14
41—45	65	71	50	43	9	11
46—50	51	45	32	31	12	10
51—55	45	51	23	33	7	9
56—60	35	47	32	27	3	7
61—65	29	45	17	20	4	4
66—70	18	34	17	9	5	5
71—75	11	23	4	14	1	—
76—80	4	8	2	4	3	1
81—85	2	2	2	4	1	1
86—90	—	2	1	2	1	—
總 數	1,271	1,369	902	763	188	167

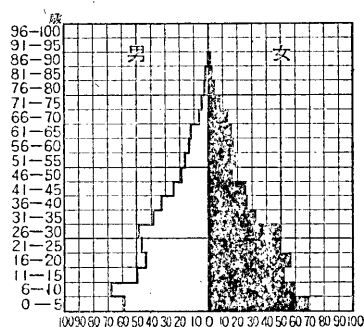
宜上その一部をとり、長崎縣立圖書館所藏、明治初年福江出張所調査に係る福江奥浦・岐宿・三井樂・玉之浦

第六表 同 上 (總數1000ニ付)

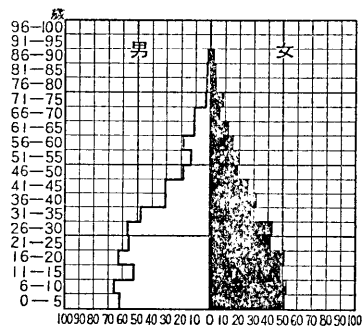
	黒 崎 村		福 江 島		葛 木 村	
	男	女	男	女	男	女
0—5	58.7	68.5	61.2	51.0	90.1	42.2
6—10	67.0	59.8	66.0	52.2	59.1	45.0
11—15	49.6	50.7	51.5	48.0	53.5	42.2
16—20	43.5	56.0	62.4	50.4	47.8	56.3
21—25	45.4	50.0	56.4	41.4	42.2	45.0
26—30	48.4	50.0	57.6	42.6	39.4	33.8
31—35	38.2	31.8	48.0	28.2	25.3	30.9
36—40	31.8	27.2	30.0	31.8	42.2	39.4
41—45	24.6	26.8	30.0	25.8	25.3	30.9
46—50	19.3	17.0	19.2	18.6	33.8	28.1
51—55	17.0	19.3	13.8	19.8	19.7	25.3
56—60	13.2	17.8	19.2	16.2	8.4	19.7
61—65	10.9	17.0	10.2	12.0	11.2	11.2
66—70	6.8	12.8	10.2	5.4	14.0	14.0
71—75	4.1	8.7	2.4	8.4	2.8	—
76—80	1.5	3.0	1.2	2.4	8.4	2.8
81—85	0.7	0.7	1.2	2.4	2.8	2.8
86—90	—	0.7	0.6	1.2	2.8	—
總 數	1,000.0		1,000.0		1,000.0	

第一圖 人口年齡構成圖

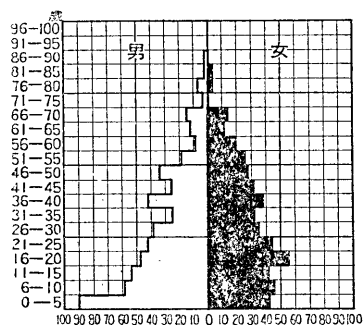
黒崎村



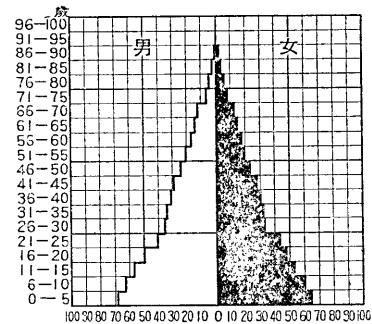
福江島



葛木村



全國(大正九年)



家族關係に現れたる切支丹の生活

居付百姓異宗之徒人口
戸數取調帳(各村分冊
四冊)の記載に基いて
集計した。尙比較の爲
に葛木村に就いても壬
申戸籍に基いて調査し
た結果を併せ掲げる事
とする。(第五表、第六
表、第一圖)
數字の煩を防ぐ爲め
各地人口の年齢を第一
圖の如く圖示し、更に
比較の便宜の爲、大正
九年國勢調査による全
國人口構成圖を附記し
たのであるが、これに

よつて一目されるやうに、今日の日本の人口増加の一般趨勢が、男女共年齢の進むに従つて次第に減少し、而も男女略同数の理想型を示すのに反して、黒崎、福江、葛木の諸地方では殊に中期迄は甚だ不整一な人口構成を示して居り、必ずしも弱年者層の膨脹を見ぬ謂はゆる人口停滞型を示してゐる。殊に福江に於いては葛木村と同様に女性の數の非常に尠いことが注目せられる。これは前記耶蘇會士の通信にも女子の出生を嫌忌する旨が記してあつたが、現に五島地方では最近迄女の子は穀つぶしと云はれてゐたやうな事を思ひ併せて見るべきである。

即ち女性の少數の事實が自然の偶發的な現象でなく、人爲的制限の手がそこにも加へられて居た事を想像するに難くない。人口數に影響する特に大なる事變も無く、人爲的制限の事實も行はれて居ないところでは、その人口年齢構成圖は完全なる二等邊三角型を示すのが常である。舊時代には天災疫癘等の災厄が人口數の上にも影響を與へて居た事は事實であるけれども、この圖に現れた弱年者の少數と、殊に五島福江に於ける女性の少數の事實とは何よりも先づ人爲的な人口制限の事實に想倒せざるを得ないのである。もとより切支丹部落の慣習が、既述の如く各地共様々に異つて居り、従つて一二の地方の事實を以て一般を斷定する事は甚だ危險である。只こゝでは間接的推定の爲の一つの試みとして右を掲げたに過ぎない。

然しながら以上を綜合するならば、初期傳道者達があらゆる困難と戦ひながら、教義の徹底の爲に、それと背反する厄介な家族的慣習の更改に鋭意努力したに拘らず、外部的指導者を失つた後の切支丹の家族的諸關係は、再び大勢に順應せざるを得なかつたのである。それは一面には生活の爲の必要が、他面には一般の社會意識の壓

力が然らしめたと見ねばならない。かくして生活は改められ、教義は忘れられても尙信仰といふ一事のみが、斷ち難き絆となつて残つたことは、吾々の興味を強く唆る問題である。